

情緒としてのあかり

～ 心を動かす空間デザインと素材の活かし方 ～

「照明」＝「電気」＝「明るさを取るための道具」

あなたはそう思っていないですか？

私たちが毎日必ずお世話になっている「電気」。暗くなったら点けるもの。家でも、職場でも、駅のホームでも、食品スーパーでも・・・あらゆる場所に「電気」＝「照明」が取り付けてあります。あまりにも当たり前のようにそこに付いているので、その存在を考えることはありませんが、電気は明るさを取るための道具以外にもとても重要な役割を担っています。

食品スーパーで食材を買う、ショッピングモールで買い物をする、外食をする、旅行に行って泊まるなど、家の外に一步踏み出すと公共の場、商業の場が乱立しています。これらの場所には必ずその場所に合わせた、「明るさを取ることで以外」の意味のある照明器具が取り付けられている場所も結構あります。

意識を持ってよくよく観察すると、目立つ場所に取り付けてあったり隠れて取り付けられていたりとは多種多様。もちろん明るさを取るための照明器具もありますが、買わせる光、くつろぐ光、演出する光と目的を持った照明器具が設置されていることも沢山あるのも事実です。

暮らしでの光はプライベートな空間になりますから、個々の嗜好に合わせて自分なりにカスタマイズすると良いでしょう。

人が商品を買う仕掛け、人の記憶に残る仕掛けには光だけでは成り立ちません。むしろ、光は脇役に徹し、主役の商品や素材をどう演出する？ 空間そのものをどうデザインする？ を優先し、そこに必要な光の仕掛けを作ることによって人々の感情を動かす行動に繋げ

るイメージでこの本を活用していただければ幸いです。

日常生活の中で、気が付かないけど実は照明効果によって操られている場面は多々あります。4万件以上の実績を持つある調査会社によると、実に7割の人が衝動買いの経験があるそうです。（女性73%、男性68%）

実店舗の場合、商品を売るために様々な工夫を凝らしますが、その場で商品に出会い、心を動かし財布の開くまでの短時間の一連の流れの中に、光の「効能」があり、この光を浴びた商品はとても魅力的に映ります。そして、思わず欲しい気持ちがメラメラと沸き起こる仕掛けです。

感情の覚醒剤とでも言いましょうか。 光という薬の効き目や働きは店舗のデザインや商品陳列にも影響がありますから光だけの効果で売り上げが上がるわけではありませんが、確実に素通り客を捕まえるきっかけになり、リピーターには売りたい商品を魅力的に訴求することに繋がる効能を発揮することでしょう。

では、明るさを取る道具だけではない光とはどのようなものかを見ていきますが、この本でいう光の定義は何かを定めたうえで本題に入ります。

〈光の定義〉

優れた空間デザインにおける光の役割は単に明るさを調整するだけでなく、目に見えるあらゆる素材に注目に着目し、その素材を引き立てるためのひかりと考えます。

素材を引き立てるためのひかりとは、

1. 空間全体を俯瞰して基礎となる光環境を決める
2. 素材特性に合わせて、光の強弱、照射範囲、光の色温度、方向、眩しさ考慮しながら素材と光の組み合わせを考える。
3. 光のゾーニングを決め、同じタイミングで回路も設計する。
4. 回路に合わせたシーンを作る。
5. シーンを作る時のポイントは、基礎照明を1とすると素材を引き立たせる照明は3倍から5倍程度の光を想定し素材と組み合わせた光を合わせる。
6. シーンは時間やイベントに合わせて変えられる仕組みにする。
7. シーンは自動で動かすことが出来るのが理想。

例えば、日常生活で利用する食品スーパー。

光のゾーニングは、

- 精肉、野菜・果物、惣菜、陳列棚とコーナー毎に細かく別ける考え方
- 壁側、平台什器、棚什器とエリア毎に大きく別ける考え方

と大きく分けて2通りあります。

その場に適した光を使い分け、買い物客に気づかれずに食品を美味しそうに演出していきます。ショーケースを使って販売するちょっと高級な精肉コーナーでは、①ショーケースの中の照明、②ショーケース全体を外からあてる照明、③通路を含めたショーケースのまわりの照明と3つの異なる照明器具を組み合わせた照明手法を取り入れている売り場もあります。



食品スーパーに限らず商業環境では光を操るだけで、如実に売り上げに繋がるだけでなく店舗の印象そのものにも大きな影響を与えます。

これは集客や顧客満足度にも大きな影響を与え、店内の明るさ（照度）を意図的に変えることは居心地の良さにも直結します。

このように、素材に焦点を定めた光を作るとは、全体を俯瞰した光から局所的な素材に当て込む光を考えさらに光の強弱も取り入れることで空間全体のデザインコンセプトにもつながる大事な担い手であることを意味します。素材と光の掛け合わせ。これが「光の

定義」です。

〈明るさのシーンを作ること〉

明るさのシーンを作ることとは、同じ空間デザインを全く違う空間に変化させることが出来るだけでなく空間デザインを引き立てる「立役者」として人の脳に記憶し無意識的に関与します。購買意欲を掻き立てるにも、落ち着いた空間を演出するにもあらゆる場面でその場にあわせた照明効果を操る技術。これが感情を動かす照明「エモーショナルライティング」の原点。すなわち、「情緒としてのあかり」の考えです。

昨今、照明器具の光源は蛍光灯から LED に変わり、調光調色が容易にできるようになりました。更に小型化が可能になり僅かな隙間にも照明器具を仕込むことができるようになりました。これは空間デザインを照明効果で変化させることがとても容易になったことを意味します。先に述べた精肉用の照明も色温度の違う LED チップを一つの器具に組み合わせた照明器具を採用した事例です。

どんなところにどんな照明をどのように仕込むと空間デザインが変わるのでしょうか？

アイディアは無限大です。しかし、アイディアはいつでも生まれるものではありません。私たちは普段の生活の中で趣味嗜好に無意識に大きく左右されて生活していると考えます。

自分では意識しなくてもあなたには基準になる何かがあり、その何かの上に気づきがある。そこからアイディアにつながると考えています。これを「潜在的基準」と位置付けます。この潜在的基準は日常生活に予想以上に密着していると仮定すると、潜在的基準はさらに二つに分けられます。「個人的な基準」と、「一般大衆の最大公約数の基準」です。

個人的な基準で例えれば、あなたは和柄の食器が好きだとします。

陶器市があると勝手に足が動き買わなくてもついついその場の時間を楽しんでしまう。

気になると衝動買いをすることも。

そしてその食器達は棚にしまわれ出番を待つ。

これが食器達の現状とします。

もし、この食器達を演出する場所を作ることが出来たなら。(飾り棚を作る)そこに小さな光があったなら。(食器に光を当てる)すると、その食器自体がインテリアの素材にな

り毎日目で楽しむことが出来る。そんなイメージです。

これは、趣味嗜好に合わせた日常生活のひとこまを切り取った個人の主観に絡むイメージの事例です。

一方、一般大衆の基準では8割以上の人に当てはまる仮説を立てそれに従います。例えば和食の料理店の照度を考える時、全体照度は色温度も照度も低く設定し、テーブル面や壁面演出用の一輪挿しなどは高い照度でメリハリをつけるなどです。

しかし、その場に適した照明器具が設置されているかということそうでもありません。おそらく世の中の照明器具の7割以上はその場に合った照明器具が他にもあるにも関わらず不本意にも設置されてしまった照明器具達が沢山います。料理が美味しそうに見えるLED照明があることを知らずにしてペンダント照明の意匠を優先してしまい、薄暗く白い光でテーブルを照らす飲食店も数えきれないほど多くあります。

日常生活における様々な空間の中にはどんな照明が使われてどんな役割を担いどんな影響を及ぼすのかを生活のシーン別に考え、私の主観・視点で解説したのがこの本を読むコツになります。

今回私は、この本をまとめる前にAIにこんな質問をしました。

- 住宅の照明プランのイメージを「住宅購入者の視点」で答えてください
- 住宅の照明プランのイメージを「建築士・設計士やインテリアコーディネーターの視点」で答えてください
- 飲食店の店舗を計画する人の照明プランのイメージを「飲食店のオーナーの視点」で答えてください

「暮らし」「食べる」「買う」「泊まる」などのキーワードで形態を定め、照明設計のプロセス、照明器具の選定方法など詳細なプロンプトも考えました。

AIは過去の様々な文献を基に多角的な角度から回答を導き出していると解釈します。それを照明専門家としての目線での解説を後ろに記述しています。

AIが回答する一般的な考え方と私のように踏み込んだ照明の専門家の考え方に結構な乖離があることに気づくと思います。共感できる部分も「えっ？」となる部分もあると思いますが、この本をヒントにあなたのオリジナルな空間デザインを是非想像（創造）してみ

てください。あなたの生活の基準がこんなところにあったのかと気が付く発見ができるかもしれません。



「一般消費者が照明設計、照明計画、照明プランといったサービス業務があることを知っていますか？」との質問に対しての答えは、

「実は、多くの一般消費者が照明設計や照明計画、照明プランニングのような専門的なサービスがあることを知らないことがよくあります」とAIの回答。

照明器具を選んだり、配灯したりする仕事自体がニッチな仕事ですから、無理はありませんが……。知らないことがよくあるではなく、ほぼ知らない人ばかり。が正しい回答なのかもしれません。

照明プランは電気工事屋さんにお問い合わせすると色々提案してくれるのではないの？ 照明器具を選んでくれるのは電気屋さんの仕事でしょ。と思っている方は意外と多いようです。

照明プランの仕事があることを知っている人でも、照明プランとは「インテリアや好みに合わせたデザイン照明器具を選ぶこと」と思っている方が結構多い印象。間違っていない。これがベース（基本）ですから。住宅照明を選ぶ場合一番多いケースは、照明器具メーカーのカatalogを開いて、食卓やキッチンに吊るすペンダント照明、玄関のブラケット照明、今は少数派ですがリビングにはシャンデリアをカatalogから気に入ったデザインの照明器具を選ぶ。こんな感じです。いまだに家電量販店の照明販売コーナーではシーリング照明が販売されています。1室1灯の時代は今も続いています。

そして、ダウンライトにおいては補助照明だと思っている人が予想以上に多い。しかも、

ダウンライトは種類が多すぎてよくわからないし、補助照明だから安価な器具でいい。こんな感じで片付けられてしまっています。

種類が多いってことは、それだけ用途別に役割があるからなのですが……。と思わず言いたくなりますが、いきなりダウンライトの講釈を言われても関心が薄い人にとっては迷惑な話なのでぐっと堪えます。

それでも、最近では間接照明を取り入れた空間が劇的に多くなりましたし、ちょっとおしゃれに見える写真では、ダウンライトを上手に目立たなくする工夫も垣間見えます。

間接照明は器具が入る深さの溝や照明器具を設置する場所を造作で作れば良い。施工寸法は照明器具メーカーのカatalogに書いてあるからそれを参考にすると良い。と思っている設計士や空間プランナーはたくさんいます。

確かにその通りです。しかし、せっかく器具が入る寸法で施工したのにある角度からは器具が丸見えになっていたり、上手く光が拡散せず予想以上に空間全体が暗かったりなかなか思い通りにいかなかったと感じる声を聞くことも少なくありません。

依頼主は照明や空間デザインのプロではないので、器具が丸見えになっていたとしても、「こんなものか」と特にクレームに繋がることはないのですが、設計者は「次回は気を付けよう」で片付けられてしまいます。そして、時間が経つと忘れてしまい、次の物件の時もベースのプランは照明器具メーカーに依頼し同じことを繰り返す。

「あっ、前回も同じこと思っていた！」と。

それでも、誰もが「理想の空間」を追い求めます。

〈ちょっとデザイン性がある〉

〈そこには居心地のよい空間になっていて〉

〈誰かと共有しても自分一人でもくつろげる〉

こんな感じのイメージがしっかりとした土台になっているのではないのでしょうか？

ここに照明の効果と役割があることをしっかりと目を向けることで、照明プランを取り入れる意味や照明プランに求められる本質は何かをしっかりと見定めることが出来ます。

デザインされた意匠器具を選ぶことの他にもテクニカル照明を選ぶようになることで幅広い選択肢を考えることが出来るようになります。同時に、インテリアの空間構成をイメージ出来るようになります。広く照明と上手に付き合うことにより、あなたにしか気が付かない素材を引き立てる空間デザインを発見することが出来ることに気づくと思います。

ここから先は色々な素材に合わせた光の選び方をお伝えします。

まずは照明器具の種類をキチンと把握理解しておきましょう。自分で考えるにも、打ち合わせをするにも、誰かに指示を出すにも照明器具の種類（呼称）を間違えると誤解が生じます。ダウンライトとスポットライトが同じ種類とっていたり、ダウンライトもペンダント照明も間接照明に分類してしまったりする事業者もあります。施主なら仕方ありませんが、空間を提案するプロの方は注意しましょう。

以下は、照明の種類の分類。おさらいです。

照明の種類

意匠照明（デザイン照明）

- ペンダント照明
- ブラケット照明
- スタンド照明
- シャンデリア照明

テクニカル照明

- ダウンライト
- スポットライト
- ライン型照明（間接照明に使う器具）

その他の照明

- キッチンライト
- 和風照明
- シーリング
- フットライト
- ベース照明
- 傾斜用照明

- アウトドア照明
- 準耐火構造
- 人感センサー付き照明
- シーンコントローラースイッチ

青字の箇所は特に私がしっかりと伝えたい重要項目。テクニカル照明を適切に選び、回路計画に繋げ、シーンコントローラースイッチで光を動かす。

テクニカル照明を優先した照明計画を考えた先に意匠照明を置くというイメージで考えることで、意匠照明とテクニカル照明を使い分けることができます。

テクニカル照明を優先することで空間デザインが劇的にパワーアップします。

例えば、

ニッチには小型のダウンライトや導光板照明、幕板を付けて極細のライン照明も仕込むこともできます。

絵画を壁に飾るのならユニバーサルダウンライトやスポットライトでどう演出するかを考えます。

私の友人にカラフルな石を集めるのが好きな40代のママがいます。せっかく集めた石達は本棚の本と本の間に置かれた状態という話を聞きました。

少し大きめの木枠の小さな台を見つけその上に石を置きます。木枠の台には宝飾店や時計店で使う「什器用の小さな照明」をセットします。電源はコンセントに挿すだけの「コンセント式タイマースイッチ」(Switch Bot など)を組み合わせることを提案しました。

20:00~0:00 までの自分で決めた時間になると自動で点灯と消灯をする仕掛け。コンセントからの電源線はイヤホンのコードくらいの細さなので、電源線は本棚の裏から目立たない工夫が意外と簡単にできます。

1000円ショップで買ったガラスのコップにアロマ用の半透明な石を入れ、その中に1000円ショップで売っている30センチのUSB テープライトをパソコンに繋げる。パソコンが駆動しているときにはコップに入ったアロマの石が光ります。ちょっとしたアイディア

でデスクまわりを飾る。こんな使い方もあります。この仕組みは、[購読無料特典](#) に詳しく書いてありますので是非ダウンロードしてみてください。

これは後付けで出来る「素材を演出」する身近な事例ですが、空間を最初から作りこむ場合、照明器具の選定と同じくらいいやそれ以上に大事なことがあります。

それは「回路設計」

回路設計

回路設計は照明設計よりも重要な役割を担うと言っても過言ではありません。どの器具とどの器具を繋ぎ合わせるか？ 繋いだ器具の光の強さはどの程度がちょうど良いのか？ 調光の有無、センサースイッチ、シーンコントローラースイッチなどを含めたスイッチの種類やデザインも大事。スイッチのデザインは見た目に関する重要な選択肢ですが、回路設計はそれよりももっと重要な位置付けです。回路設計の目的は、

- ひかりをどうまとめ、どう動かすか。
- スイッチは ON/OFF でいいのか。それとも調光機能があった方がいいのか。
- 光を動かすのであれば空間全体を操り光のシーンを作るべき。
- シーンを作るなら時間別にどのように光を組み立てるか。
- どのメーカーのシーンコントローラースイッチを選ぶか。

導線を考えながら回路設計と光のデザインを設計します。例えば、リビングの壁スイッチの上に小さなダウンライトを配灯し、そのダウンライトと玄関照明を同じ回路で結ぶ。これにより、リビングのドアを開けても部屋の中にはあかりが灯り、壁スイッチまで暗い部屋を歩かなくてもよい。リビング内のスイッチは生活導線を優先した導線上に置くことが出来ます。

通常はリビングドアを開けたすぐ近くにリビング照明のスイッチを計画しますが、リビングドアに設置したスイッチは生活導線上ではないケースがほとんど。部屋のドアを開けたらそこにスイッチを置くことが常識化されていますがそれが最良ではありません。生活導線を考えると、リビングダイニングの中心にスイッチがある方が便利な場合も考えられま

す。

さて、本題に入ります。

照明プランに対してイメージを、一般ユーザー、建築家、インテリアコーディネーター（以下 IC）やインテリアプランナーが考える視点（箇条書き）AI に質問し、それに対して照明の専門家がどう捉え照明設計につなげるかを比較しながら解説します。

〈家を建てる人が思っている照明プランのイメージ〉

〈一般消費者が持つイメージ〉

1. 機能性と実用性

各部屋の用途に応じた照明計画：

- リビングルーム：リラックスできる暖かい光、読書用のスポットライトなど。
- キッチン：作業のしやすい明るい白色光、カウンター上のペンダントライト。
- 寝室：リラックスできる間接照明や調光可能なランプ。
- バスルーム：明るい白色光、顔を照らすための鏡周りの照明。
- 玄関、階段、廊下などの共用部：安全性を優先した照明計画

これらは、住宅情報やインテリア関連の媒体に度々出てきます。暖かい光→どんな光？
読書用のスポットライト→いつもスマホ見ているなあ・・・ キッチンカウンターにはペンダント→検索すると確かにペンダントの写真が多く出てくる。そんな感じで「ふわっ」としたイメージを描くと思います。

解説)

リビングなど長い時間を過ごす場所には、リラックスできる暖かい光（電球色）が好まれるが、白い光を好む人も一定数います。

この場合、電球色が良いと決めつけないで、住まわれる方の好みの色を基準に、もし今後光の色を変えることに少しでも興味を持つのならこれから住む光環境をイメージすることも大事。

もちろんリビングに白色だって良いと思います。明るい環境を好む方は、そもそも “電球色＝暗い” というイメージがありますから。リビングでの読書灯は今の時代実用的ではありません。

ソファの横にスマホの高速充電器があった方が数倍実用的で便利。Panasonic からは MAX60W の PDUSB ポートが販売されています。（2023 年 6 月より）

キッチンでは作業性が高い白色光は正解です。但し、対面キッチンが多い間取りの場合、キッチン照明はダイニングテーブルと近くなるので、僕は温白色の色温度器具を推奨します。

温白色にすることで、電球色のダイニング照明を採用しても大きな色温度の差が生じません。少し器具光束の高い照明器具を選ぶことでキッチンでの作業効率は格段に向上します。

カウンター上にペンダント照明を選ぶ方も多いですが、ダイニングテーブルの照明選定との干渉を考慮すると良いでしょう。

バスルームはリラックスできる光と実用性のある光とを使い分ける設計も良いと思っています。ODELIC の調光調色ができるリモコンスイッチは完全防水でお風呂でも使える便利なアイテム。LIXIL などのバスルーム販売メーカーが採用すればもっとバスルーム時間が快適になるのに。実にもったいないと思っています。

2. デザイン性

インテリアと調和する照明器具の選択：

- 家具や壁の色とマッチするデザイン。
- モダン、クラシック、ナチュラルなど、スタイルに合わせた照明器具の選定。

解説)

インテリアとの調和を考えた照明器具の選定は意匠デザインを優先する傾向にあります。デザインを重視した意匠性のある照明器具の選定は一旦脇に置き、空間全体を俯瞰してみてください。

デザイン照明が無くても空間に存在する様々な素材達にフォーカスしてください。そして、その素材達を演出する方法を考えてください。

明るさは副産物として捉え、全体照度は間接照明で整えると素材が活きる空間デザインを作ることができます。どうしても、空間にアクセントが欲しい時にデザイン器具を選定すれば良いという選択肢を提唱します。

3. エネルギー効率

省エネで環境に優しい照明：

- LED ライトの使用。
- 調光スイッチやタイマーを導入してエネルギー消費を抑える工夫。

解説)

エネルギー効率の視点では、蛍光灯より LED に若干軍配が上がります。環境を考えると、水銀の使用の有無が大きな差。蛍光灯には水銀が僅かに使用されており、製造を終了したメーカーもすでにあります。LED は水銀が使用されておらず、環境にやさしい照明と言えます。

調光スイッチは、エネルギー効率にももちろん寄与しますが、なんといっても空間演出に欠かせないアイテムです。

リビング、ダイニング、寝室などの居室は必須。僕はバスルームも推奨しています。タイマースイッチはあまり使いません。その代わり、センサースwitchを使います。センサースwitchは設置場所により機能が違うので選ぶ時は注意が必要ですが、センサースwitchを付けると便利な場所は結構あります。

消し忘れ防止にもなりますから節電にも寄与します。外部照明は明暗センサースイッチ（EE スイッチ）。内部は全て人感センサースイッチ。玄関、トイレ、階段、2F の廊下、洗面所。エネルギー効率よりも便利機能と言っても良いと思います。

居住者の快適さを考えた照明計画：

- 落ち着いた雰囲気を作るための暖色系の光。
- パーティーやイベント時のムード照明。
- 外部照明も含めたトータルプラン（庭、玄関周りのライトアップ）。
-

解説）

落ち着いた雰囲気には暖色系の光（電球色）が合うというのには、「クルーズフ効果」というエビデンスがあります。

白色系で明るさを落とすと陰気に感じ不快ゾーンの域に入ってしまいます。とは言っても、人の好みはそれぞれですから居住者の好みの色温度をまず優先して計画します。イベント照明を求める声は意外と多く聞きますが、実用性は少なく取り入れてみたものの一度も使わないケースもあります。慎重に計画しましょう。

外部照明は外構業者がやるもの。と思っている建築業者も一定数存在します。この場合、外部コンセントをいくつか設置するに留まります。ライトアップも必要ですが、防犯を兼ねた照明計画は重要な要因です。

5. 将来の変更に対応

ライフスタイルの変化に対応できる柔軟な照明計画：

- 調光機能付きの照明。
- スマートライトの導入（スマホで操作できる照明）。

解説)

調光機能が必要な場所は、主にリビング、ダイニング、寝室などの居室、バスルーム。ライフスタイルというよりは、パーソナルに合わせた柔軟な変更に対応できる仕組みが調光機能。

但し、設置する場所によっては、グレア（眩しさ）対策や光束（光の量）を考えた計画をすると良いでしょう。

スマートライトの導入は賛否があります。便利な反面、導入時の照明器具のバージョンがスマホのアップデートやバージョンアップについて行けず、誤動作の原因になることは現在も多々あります。ここは注意が必要です。

6. コスト

予算に合わせた照明プラン：

- 高価な照明器具とリーズナブルな照明器具のバランス。
- コストパフォーマンスの良い選択肢。
-

解説)

高価な安価など、価格だけではなかなか判断できないのがテクニカル照明器具。同じ器具に見えても光の出る量が3倍も違う器具もあります。

安いダウンライトは眩しいので、長時間滞在する空間では光自体が不快に感じます。高齢者がいる世帯は絶対に避けるべきです。逆に玄関や廊下などの通過点に使用する器具は安い器具でもいいと思います。

7. 安全性

安全を確保するための照明計画：

- 階段や廊下の足元照明。
- センサーライトの設置。

-

解説)

夜間は足元照明で安全対策を。と考える方は多い傾向。しかし、足元だけよりも全体的に照度を落とした計画の方が安全性は確保できます。

設計上で大事なポイントは「壁と照らすこと」廊下の真ん中にダウンライトを設置すれば、光は床面を照らします。壁から僅かに離れた位置に設置すれば壁にも床にも光が当たります。

すなわち、小さな光でも明るく感じる「明るさ感」を確保できる仕掛け。低い照度でも明るく感じるので夜間の歩行に適した照明設計です。

〈家を建てる人が思っている照明プランのイメージ〉

〈建築家・空間デザイナー、インテリアコーディネーターなどが持つ照明イメージ〉

建築設計士やインテリアコーディネーターは、照明プランを考える際に非常に専門的かつ多面的なアプローチを取ります。以下は、彼らが考える「照明プランのイメージ」です。

1. 空間全体のコンセプト

全体的なデザインテーマに沿った照明プラン：

- 建築のスタイルやデザインコンセプトに合う照明。
- モダン、クラシック、ミニマル、スカンジナビアンなど、空間のテーマを引き立てる照明設計。

解説)

空間デザインのコンセプトは設計士やインテリアコーディネーター（以下 IC）の主観によるものが多い傾向。

設計士や IC のデザインセンスに共感し全面的に信頼するのであれば問題ありません。しかし、殆どの場合は暮らしをする施主側に決定権があります。

施主は提案の幅は広いに越したことはありませんが、風呂敷を広げすぎると選定するのに困惑します。

ここでもテクニカル照明の計画が役立ちます。と言っても設計士や IC がテクニカル照明のスキルを有していればよいが、そうでない場合、空間のテーマに沿った意匠照明を選択しがち。これが悪いわけではありません。

せっかくなら、例えば本棚の本の後ろに小さな照明を仕込んだり、食器棚などの家具に照明器具を仕込んだりと何かしらの素材にフォーカスしてその素材に光を仕込んだり当てることを考えるなど多角的に照明を使ったデザインを考えて空間全体を構成しても良いと思います。

2. 層別照明

複数の照明層を使った立体的な照明設計：

- アンビエント照明（全般照明）：空間全体を均一に照らす。
- タスク照明：特定の作業を行う場所に集中した照明。
- アクセント照明：アート作品や特定のデザイン要素を強調するための照明。

解説)

アンビエント照明はとても有効な照明手法です。これは僕も推奨します。

施工の詳細図を展開図と共に合わせ設計することで現場都合に合わせた変更を阻止できます。

しかし、失敗も多々あります。

コーブ照明の場合、光の広がり少なく明るくない空間に仕上がるケースは意外と多い。この場合、コーブ照明と天井が300ミリ以上空いているのが理想です。仮に100ミリしか空きがなければコーブ照明の計画は見直しましょう。

コーニス照明の場合、器具の丸見え状態になってしまうケースが多い。丸見えになることで眩しさが発生します。せっかく器具を隠して壁面の素材を演出する計画が器具に目が行ってしまい素材の良さが台無しに。

タスク照明は、オフィス、作業場、デスクには有効ですが、居住空間でのタスク照明はあまり考えなくて良いでしょう。

アクセント照明はとても有効な照明手法です。この場合、配光角度と照明器具の設置位置を優先にし、次に色温度を考える順番が良いでしょう。グレア対策も視野に入れましょう。

3. 光の色温度と Ra（演色性）

適切な色温度と高い演色性の照明を選択：

- 居住空間には暖色系の光（2700K～3000K）を採用。
- 作業空間には中立色（3500K～4000K）を採用。
- 演色性（Ra）が高く、物の色を正確に再現できる照明。

解説）

色温度の考え方は2極化します。

一つは、居住空間は暖色系（電球色）が適していることを説明し勧めること。

もう一つは、人それぞれの色の好みを尊重すること。（白色が好きであれば無理に電球色を勧めない）

もし、後者であれば、空間照度を高めに設定することをお勧めします。白色が好きな人は明るさを求めます。

逆に言うと暖色系は暗いイメージを持たれているケースが多いことです。ここで、暖色系でも明るくすることが出来ますよ。と伝えても、そもそも暖色系は暗いイメージを持たれているので、言葉だけでは説得出来ません。

ご自身で納得がいけば考えも変わりますが、人間の好みはそう簡単には変わりませんから。

作業効率を上げるには、高色温度、高照度に限ります。細かな作業をするなら至近距離から光を照射するスタンド照明が適します。光は距離の二乗に反比例する特性がありますから、近い距離から照射は少ない光量（低ワット）でも照度（ルクス）を確保できます。

最近のスタンド照明は調光調色の機能付きもありとても便利です。

食卓テーブルとキッチンの光は演色性を最優先します。

生花が好きな方も花を置く場所の光は高演色の光を考えます。

その他の場所は特に演色性を優先しなくても良い。というのが僕の考えです。

4. 照度と均整度

適切な照度と光の均整度を計算：

- 部屋の用途に応じた適切な照度（明るさ）。
- 光の分布が均一で、眩しさを感じない設計。

解説)

照度と均整度を独自の計算方法で数値化している唯一のメーカーが Panasonic。

明るさ感を求めるならば鉛直面（壁面）を気にしよう。という考え方。

極端な言い方をすれば、照度は床面を基準に数値化するので、床面照度を気にすることによりあまり意味を感じない。それよりも、空間が明るく感じるのか？ 感じないのか？の方が重要な要素。

明るさ感の均整度を数値化したのが「Feu」（フー）

光の強弱（メリハリ）を数値化したのが「V」（ヴィー）。

これは Panasonic の独自の指標です。

すなわち、一般的な設計者や IC が思っている部屋の用途に応じた照度の計算や光の分布が均一な計算は空間デザインを考える上では阻害要因になり得ることもある。ということです。

言い換えれば、照度を気にするよりも空間が明るく感じるのか？暗く感じるのか？を優先すべき。そこには照度計算は必要ない。ということに繋がります。

例えば、15 畳のリビングダイニングの「壁」に掛けてある 50 センチ×50 センチの 1 枚の絵画。ここに光を当てて他の照明は全て消す。照度計算は「床面」が基本ですから、照度はほぼありません。

でも、実際には壁面の絵が演出され、こぼれた光で十分な明るさが確保できる。本は読めないが、映画を見るならちょうどいい。ダイニングテーブルに調光された僅かな光があれば完璧な演出された空間が出来上がります。

5. デザインと美学

照明器具そのもののデザインにも注目：

- インテリアと調和する美しい照明器具を選ぶ。
- 照明器具がデザインの一部として機能するように配置。

解説)

ここでは、照明器具のデザイン性に注目することが「美」であることを唱えている傾向が強く表れています。特に IC の皆さんはこの傾向がみられます。

前にも話しましたが、これを否定するつもりはありません。大事なことです。僕が言いたいのは、照明器具のデザインを考えるのは、空間デザインを決める最後の仕上げの場面で、どうしても華が欲しい時やシンプルな空間に照明器具のデザインは有効だと考える時です。

ですが、照明器具のデザインがなくても他の素材要素で演出する空間デザインが出来るの

であれば、デザイン照明は視覚的力が強いので他の素材要素が負けてしまいます。

上記の絵画を例にすると、絵画だけを光らせるのか？絵画のまわりにも光を当てるのか？それとも絵画の後ろにひかりを仕込み絵画が浮いているようにシルエットにするのか？

複数の絵画を同じエリアに飾るのであれば、特に気に入った絵画だけにフォーカスしてそこだけ夜になると光で演出する仕掛けを作るとか？

と光の使い方で色々な演出方法を考えることが出来ます。そういう演出が何もなければデザイン照明を検討すれば良いと思います。

6. エネルギー効率と持続可能性

エネルギー効率が高く、環境に優しい照明ソリューション：

- LED 照明を主に使用。
- スマートホームシステムでエネルギー消費を抑制。

解説)

エネルギー効率とそのソリューションは家を建てる施主も提案する建築士や I C も認識のずれはほぼ無く同じ意識間隔であると考えます。

日本におけるスマートホームシステムは、エネルギー効率の見える化に始まり、現在は蓄電池の標準化の時代になりつつあります。一般家庭の消費電力の多いベスト 3 は、エアコン 30~40%、冷蔵庫 15~20%、照明 10%~20%を占めると言われています。

蓄電池と連動する回路を予め設定することや、停電などの有事の際に全ての電力を蓄電池に切り替えるなど蓄電池の容量により設計は変わります。照明ソリューションと連動させるには、時間帯によって照明の点滅を自動にするシステムを導入するなどの設計が有効になります。

7. ユーザー体験

住まう人の体験を考慮した照明設計：

- 調光機能やカラー機能を取り入れ、雰囲気を変えることができる照明。
- スマート照明の取り入れで、利便性を向上。

解説)

カラー照明に関してのユーザー体験は嗜好の範疇ですのであまり参考にはならないでしょう。雰囲気を変えるなら、調光調色の器具に加えて、シーンコントローラースイッチの導入をお勧めします。

メーカーにより機能や設定が違うので比較検討し、ユーザー体験を参考に暮らしのスタイルに合ったスイッチ計画を設計すると良いでしょう。

日本におけるスマート照明システムは、メーカー各社の独自性が強く汎用性がないのが特徴。かといって汎用性の高い海外のソリューションは導入コストが高く実用的ではありません。トータルで考えると Panasonic のソリューションは使い勝手が良いと感じます。

リビングダイニングの空間に限って設計するなら、ODELIC や KOIZUMI 照明の Bluetooth 対応器具が販売されていますが、スマホのバージョン進化に照明器具のアップデートがついて行けないなどの課題があるので導入する際には注意が必要です。

8. 安全性と機能性

安全かつ機能的な照明設計：

- 階段や廊下などの安全照明。
- 夜間の視認性を確保するための外部照明。

解説)

施工事例を検索すると階段はブラケット照明、廊下はダウンライトが多く稀にフットライトの事例が散見します。

階段や廊下の壁にニッチを作り、小物を置いてニッチ用の小さな照明を仕込む。階段も廊下も歩ける明るさがあれば十分ですから演出を兼ねてニッチと照明の組み合わせはお勧めです。

ニッチ照明は小さな空間ですから光源が上からなのか下にあるかで印象は大きく変わります。ちょっとしたことですけどデザインを考える選択肢は広がります。

但し、安全性を優先するなら、ニッチの奥に照明を仕込み小物をシルエットに浮かばせる照明手法は光の量が表に出てこないなので設計には注意が必要。

ダウンライトに関しては、廊下の中心に配灯することがほとんど。平面図で見れば設計上きれいな配灯計画に見えますが、左右どちらかの壁に寄せた配灯計画をお勧めします。

理由は簡単。壁に光が当たることで、光の出る量が少ない器具でも明るく感じる効果が得られます。これは、夜間トイレなどに行く際明る過ぎない空間を作ることに繋がるからです。

9. 維持管理のしやすさ

メンテナンスのしやすさを考慮した照明プラン：

- ランプ交換のしやすいデザイン。
- 長寿命の照明器具を選ぶ。

解説)

ランプ交換が出来る LED を勧める方もいますが、基本的に LED 照明はランプ交換不要。すなわちメンテナンスフリーと思っていても良いでしょう。

一般的に LED 照明の寿命は 40000 時間とされています。この 40000 時間は内部の電子部品の寿命で LED 素子自体は半永久に光続けます。1 日 10 時間点灯すると仮定すれば年間 3650 時間。単純計算では 10 年以上持つことになります。

そう考えると吹抜けの高天井にもダウンライトを付けたいくなりますが、全ての器具が優秀とは限りません。機械ものですから当たり外れも一定数あり、その場合照明器具はメーカー保証内であっても交換費用は対象外としているメーカーがほとんどで、吹抜けの場合の交換費用はバカに出来ません。

素人では出来ませんから、電気工事の資格を持つ業者に頼むことになります。このリスクをどう捉えるかを施主としっかり意見交換することをお勧めします。

〈総括〉

建築設計士やインテリアコーディネーターは、多角的に総合的に考慮して、クライアントのニーズや建物の特性に合わせた最適な照明プランを提案します。プロとしての知識と経験は、空間をより快適で美しいものにするための重要な役割を果たしています。一方で、彼らは照明のプロではありません。照明の基礎知識は元々備わっていますが、光の感じ方は人の好みによって変わります。照明の専門家から最新の情報を入手し意見を交えることで彼らが考える空間デザインに華を添えることが可能となります。

〈飲食店の店舗を計画する人が求めている照明プランのイメージ〉

飲食店の店舗を計画する際には、照明プランが非常に重要です。照明は店の雰囲気を作り、お客様の体験価値に大きな影響を与えます。AIに様々なプロンプトを入れて飲食店を経営する人が考える照明プランのイメージを聞いてみましたが、意外と抽象的な答えで照明に対する比重は大きくないことが見えました。飲食店ですから、料理に関する比重が多くなることは当然ですが、その店で過ごす時間そのものの体験価値として考えるのなら、来店者に良い記憶を残すためにも照明の役割は大きいと考えます。

〈店舗側が思う照明プランのイメージ〉

1. 雰囲気作り

店舗のコンセプトやテーマに合った照明：

- ・ コース料理を提供するような雰囲気のレストランには、暖かい色温度の照明やキャンドルライトのような柔らかい演出照明を使用。
- ・ モダンでスタイリッシュなカフェには、シャープな白色光やデザイン性の高いペンダントライトを配置。

解説)

飲食店を経営する人の多くは味には拘るが、雰囲気作りは漠然としたイメージしかないことが多く、ほとんどが店舗設計者の意見を参考にします。

例えば、モダンでスタイリッシュなカフェ。白を基調としたインテリアデザインには白色の色温度を合わせたくなるが、白色系の爽やかな光は、日中は良いが夜に調光をかけてしまうと一気に陰気な雰囲気になってしまう。

特に冬至前後の日の短い時期は外の暗さも相まって一層陰気に拍車をかけてしまうのは実にもったいない。せっかく内装デザインが素敵でも光の質ひとつで空間価値は変わってしまいます。白を基調としたモダンでスタイリッシュな空間でも夜は電球色のような暖色系の光の色温度が良いでしょう。

今は色温度を切り替えることができる LED 照明もありますから、昼と夜とで色温度の違うシーンを作ることできます。

飲食店は電球色の色温度を採用するケースが一般的ですが、コンセプトに合わせた内装デザインと光の色温度は必ずしも合わせる必要はありません。

食事の美味しさ以外にもその空間と時間に価値を感じるデザインが求められると考えます。

来店者に良い記憶を残し、リピーターになってもらうためにも光源は演色性の高い器具を選び、調光システムを取り入れることは来店者の記憶の満足度を上げる要素としてはとても大きな要因です。

2. ゾーニングと空間の分割

エリアごとに異なる照明プラン：

一般的なイメージ)

- ダイニングスペース、バーカウンター、プライベートルーム、テラス席など、各エリアに適した照明設計。
- 客席ごとに異なる照明を使い分けることで、各エリアに独自の雰囲気を持たせる。

解説)

ゾーニングの考えを取り入れることはとても重要な要因。

一般的にはエリア毎に回路分けをしますが、この回路の分け方をインテリアデザインに合わせて組み立て、シーン設定まで考えるとゾーニングが活かされます。

例えば、

ダイニングスペースエリアとバーカウンターのエリアが同一空間で構成されている場合、
①ダイニングテーブルの光、②ベース照明の光、③絵画などの演出に使う光、④天井や壁を照らす光、⑤スタンド照明やブラケット照明の意匠照明の光、⑥バーエリアのカウンターのトップの光、⑦バーカウンターのテーブル下の足元の光、⑧ボトル棚の光、⑨バーテンドーへの光。

ざっと思いついただけでも2つのゾーニングを合わせると9つの回路分けが必要。

ここでとても大事なことは、この9つの回路の明るさをどの程度にするかを考え、どうコントロールするかが大きなポイント。

光の強弱の設定が空間の演出の良し悪しを大きく変えます。

ここで大活躍するのが「シーンコントローラースイッチ」

ボタン一つで予め設定したシーンを呼び出すことができます。高機能型になると時間指定もできるので、決まった時間になると自動でシーンが切り替わる便利なスイッチです。

3. 視覚的な快適さ

お客様が快適に過ごせる照明：

- ・ 眩しさを感じさせない明るさの確保。
- ・ 食事を美味しそうに見せるための光の演色性（Ra）が高い照明。
- ・ 店内演出の照明

解説)

メニューやディスプレイを演出するためにそこに光を照射するケースはよくあります。

しかし、座る位置によっては、演出用の光をダイレクトに目に受けてしまうケースは結構多くあります。長時間同じ位置で過ごすには大きなストレスを伴いかねません。

飲食店は着座スタイルが基本型。同じ位置に退店するまで留まります。どの席に座っても照明が眩しいと感じないような配灯設計が求められます。予め角度を調整できる器具を選ぶ。若しくは配線ダクトレールを利用し照明器具の位置を変えられる設計が良いでしょう。

ほんのちょっとした気遣いが、その店の雰囲気や満足度に大きな影響を与えます。

お店のスタッフが1席1席に座って眩しさチェックをするだけ。

このケースはボックス席に出現することが多い印象。非常に厄介な光です。例えば、4人席の場合、眩しい光を受けるのは4人席の中で1席だけ。そんな感じです。

眩しく感じる人以外は快適な光環境だということ。

「視覚的な快適さ」を確保するためには、地道な意識改革が必要となります。食事を美味しく見せるための光の存在を知っている飲食店経営者はほとんどいません。

カウンターテーブルを併設し、料理人と客が対面する場面では光のオーダーをデザイナーが受けることもあります、それ以外はほぼありません。

料理人が丹誠込めて作った料理を目で楽しむ懐石料理などは彩（いろどり）を鮮やかに演出するために「演色評価指数 Ra」の高い光源を選ぶと良いでしょう。

但し、ラーメン店や中華店のようなスープや大皿料理の場合はこの限りではありません。この場合は「環境照明」というベースになる地明かりの明るさに重点を置き、演出する何かをいくつか選定しそこに光を取り入れることで、インテリアや空間デザインを整えると良いでしょう。

この演出照明の考え方は、環境照明を1とした場合、演出照明は3～5倍程度の照度確保を目安にすると演出する素材を活かすことができます。

4. タスク照明

スタッフの作業効率を考慮した照明：

- キッチンやバーカウンターには明るいタスク照明を配置。
- レジカウンターやスタッフの動線上には十分な明るさを確保。

解説)

飲食店のタスク照明は作業効率に直結することは言うまでもありません。

キッチンが厨房のように別室の場合は作業性を重視した明るさと高色温度の環境照明を検討します。照度は 1000 ルクス以上の若干高めの設定。客席と近い場合、色温度は温白色にするなど、空間デザインを邪魔しないように配慮すると良いでしょう。

特に作業スペースの上に収納棚がある場合は、上部からの環境照明が棚に邪魔され「手暗がり」になります。厨房のレイアウトを決める際にはなかなか検討できない盲点になるところ。失敗事例の上位に鎮座します。

解決方法は意外と簡単で、ローボルト（12V や 24V）で稼働するシリコン型の防水仕様の器具を取り付けます。電源コードは直径 3 ミリ程度なので取り回しも簡単です。電気工事の資格も不要なので、自分たちでの DIY レベルで完結できるメリットがあります。

一方、レジカウンターの場合は配光角度に注して局所的に作業効率を重視した照明が良いでしょう。

ファミレスのようなベース照明だけで構成する店内であれば何も気にすることはないですが、店内を暗めの照度で整え演出した空間であれば、内装デザインと合わせた照明設計が必要です。

レジは客と店の最後の接点の場所。お互いにストレスのない会計処理をするためにも局所的にしっかりとした明るさを確保する必要があります。局所的に照度をあげても空間デザインに大きな影響はありません。むしろ、レジ周りを素敵にデザインし顧客に対して最高の良い印象を残す空間アイテムするくらい考えてもいい場所です。

5. エネルギー効率

エコフレンドリーな照明ソリューション：

- LED 照明を主に使用し、エネルギー消費を抑える。
- 調光機能を取り入れ、時間帯や用途に応じて照明の明るさを調整。

解説)

一般的には LED 照明はエネルギー消費を抑えるとの見識が多いのですが、蛍光灯主流の時代から LED に変わってもエネルギー効率はさほど変わりません。

LED 照明は蛍光灯に比べ約 4 倍前後の長寿命が特徴。照明器具が LED に変わり一番大きなメリットは、調光機能が付いた LED 照明器具が多く商品化されたこと。調光、非調光の器具が混在するので選定には注意が必要ですが、調光することによりエネルギー消費を抑えられることは言うまでもありません。

昨今、エネルギー消費（明るさの基準）を示す表示がワット（W）からルーメン（lm）に変わり明るさを判断する基準が変わりました。

例えば、40W の直管型蛍光灯を LED 化する場合、形（長さ）が同じでも、蛍光灯と同等レベルの明るさもあれば、その半分の明るさの LED 照明もあります。倍の明るさの LED 照明もあります。

このように用途に合わせて選ぶことができるようになりました。更に厄介なのが、照明器具のメーカーによっては、同じ 40W 型と表示してある LED 照明器具でもルーメン数に倍の差があるなど一般消費者が容易に判断するは難しい時代であることは否めません。照明器具の選定がエネルギー消費にダイレクトに反映されます。

誤った器具選定をしてしまい、調光機能がなければエネルギー消費は効率の良い選択肢にはなくなってしまいます。

「ワット数と明るさを同じ判断基準で選んではダメ」

これが現在の LED 照明の選定事情です。

6. デザイン性とブランドイメージ

お店のデザインやブランドイメージに合った照明器具：

- インテリアデザインと調和するデザイン性の高い照明器具。
- ブランドイメージを強化するためのロゴやサインライトのデザイン。

解説)

飲食店におけるデザイン性は、新規客を取り込むうえで最大限に重要な要因と考えます。

初めての顧客は店内の雰囲気重点を置き店の選択を行います。路面店であればファサードのデザインはインテリアデザインより重要といっても過言ではありません。

店の売り上げはリピート客増やすことも重要ですが、新規客を取り込みがその後のリピーター客を増やすベースになるからと考えます。いわゆる第一印象をどう作り演出するか。

ここに付随するサインやロゴデザインもちろん重要なアイテムですが、意外と「光」を意識する人は少ないのです。

「昼より夜を意識せよ！」

これが僕の基盤。もちろん僕は光を扱う仕事をしていますから当然なのですが。昼は強い外光もあり、優れたサインも周りの景色に埋もれてしまいます。夜になると周りの景色に埋もれることがなくなるので、工夫次第で訴求効果の影響は大きくなります。

サイン看板を目立たせることももちろん大事ですが、店内を見せる（魅せる）装飾デザインを同時に考えることで店の雰囲気を魅力的に伝えることができますようになります。

この場合、照明器具を選定する段階で一番多いのは「照明器具自体のデザイン」を選ぶこと。もちろんダメではありません。インテリア性の高い空間デザインと調和がとれたペンダント照明やブラケット照明を選ぶことは否定しません。

それよりも大事なことは、ペンダントにしてもブラケットにしても明るさを変えられる仕組みが伴っている器具かどうか。そして、さらに大事な要因は、それらの器具がゾーニングによって回路分けがされているか。です。

ゾーニングの考え方は色々ありますが、一番やってはいけないことはエリアで回路を決めること。

例えば客席スペースを入り口側、中央、奥側と3つのエリアに分けてスイッチ計画をしてしまうこと。こうなれば照明は明るさを取る道具と化し、電気を点けるか消すかの2択になってしまいます。

これが工場や事務所なら何も問題はありません。飲食店は違います。では、どうするのか？

② 環境照明（ベース照明）

② 重点照明（テーブル上の照明）

③ 演出照明（ボトル棚やブラケット照明）

の3つに分け見渡せる空間であれば一つのエリアをして計画します。

時間帯によって環境照明の照度を変えても良いでしょう。その際に重点照明と演出照明の照度バランスを見ながら明るさ設定します。いわゆる「シーンを作る」という考え方で

今は、どこの照明器具メーカーもシーンコントローラースイッチが商品化されています。ボタンひとつでシーンを変えることができる便利な機能スイッチです。これを使わない手はありません。

店のオペレーションに不安があれば、時間で勝手にシーンが変わる機能を持ったスイッチも商品化されています。飲食店の照明の役割は、サイン計画、空間デザイン、装飾デザインが空間の雰囲気はどう影響を与えるかをデザイナー、設計士、施主を同一のテーブルで考えることが理想。

施主が「全て任せる」というのであれば、照明の専門家とインテリア空間の専門家が意見することで、今まで見えなかったことに気づき売り上げにつながる新しい空間デザインを創作することにつながります。

7. フレキシビリティ

イベントや季節に応じた柔軟な照明プラン：

- 調光や色変化が可能なスマート照明システム。
- 季節ごとのデコレーションに合わせた照明の変更が容易な設計。

解説)

LED 照明は調光調色が容易にできる時代です。明るさを変えるだけでなく、外の色温度に合わせた調光調色システムを導入する施設も多くなりました。

毎日変化する日没の時間に合わせて店内の明るさが変えられる仕掛けは多くの商業施設で導入されています。店内にいる人に気づかれないように、少し長めのフェードでシーンの切り替えると高級感を演出できます。

これにより、来店者は体内リズムに合わせた居心地の良い空間に身を置くことができます。照明の存在に気づかれないようにすることがポイントです。

環境照明の考え方は、日中は高色温度、日没後は低色温度と分けるだけでも店内の雰囲気が大きく変わります。これは来店者だけではなくスタッフの時間意識にもつながります。

そして、イベント対応や季節の模様替えに合わせた照明計画はリピート客を獲得するためにも常に時流に合わせたデザインや変化や進化が求められます。

飲食店の照明プランは、単なる明るさの確保だけでなく、デザインや雰囲気作り、安全性、エネルギー効率など多岐にわたる要素を考慮して計画されます。これにより、訪れるお客様にとって快適で魅力的な空間を提供することが可能になります。

〈物販店の店舗を計画する人が求めている照明プランのイメージ〉

物販店の照明プランは、商品の魅力を最大限に引き出し、お客様にとって快適なショッピング体験を提供し物品を販売し売り上げに繋げること。店舗側の照明の考え方と照明の専門家の視点で見えることは予想以上に乖離しています。

前半は一般的な店舗照明に求められる項目。後半は三原の解説です。

1. 商品のハイライト

商品を効果的に見せるための照明：

- アクセント照明を使って、特定の商品やディスプレイを強調。
- ショーウィンドウや展示棚にスポットライトを配置して商品を目立たせる。
- 商品の色や質感を正確に再現するための高い演色性（Ra）の照明を使用。

解説）

商品をハイライトさせることは商品を売るために必要な最大の重要項目。効果的に商品を見せるためには、レイアウトに合わせて照明器具の選定をより具体的に選定することが必要です。

商品構成にもよりますが、アパレル店の場合、VMD と LIGHTING はセットで考えることが望ましい。

レイアウトは季節により模様替えをしますが、それに合わせて照明の位置や向きを意識して変える店舗は多くありません。マネキンやトルソーの位置を少し前にずらしただけでも、光の向きを変えなければボディーから光がずれ、せっかくのディスプレイの効果が半減してしまいます。

マネキンなどの VP にあてる照度はベース照明の 5 倍程度と言われています。雑貨店など陳列棚が多ければ棚照明を設定するなど照明器具が取り付けられることを想定した什器を採用すると良いでしょう。

靴や時計など、一品ものを展示するなら、展示品にフォーカスするスポット照明を採用する工夫も必要です。販売品目や商品の価格帯によって照明の考え方は異なります。

言わば、照明はオーダーメイドするのが当たりまえの考え方をお勧めします。

2. 明るさと均整度

店舗全体の明るさを均一に保つ：

- 全般照明を使って、店舗内全体に均一な明るさを提供。
- 明るさのムラがないように照明を配置し、お客様が快適に商品を見ることができる環境を整える。

解説)

均整照度は店内を快適に巡回するうえで大切です。

しかし、光のムラがなければコンビニやドラッグストアのような店内になってしまいます。

物販店はその場その時に会った商品を買う場所。だからこそ、一瞬のわずかな時間に買い物客の目を引く仕組みと仕掛けが必要。照明の均整度は明るさの基準を作るもの。その基準に合わせて商品を演出するメリハリのある照明設計が必要なのです。これが出来ている店舗と出来ていない店舗では、売り上げに大きな差が生じます。あえて明るさのムラを作ることを推奨します。

3. 色温度の考慮

適切な色温度を選択：

- 一般的な物販店では、中立色から白色（3500K～5000K）を採用することが多い。
- 高級感を演出する場合は、暖色系の照明（2700K～3000K）を使用。

解説)

高級感を出すには低色温度ではなく、内装デザインが暖色系であれば低色温度が良いでしょう。コスメの店舗は白を基調にした内装デザインが多い傾向。

この場合、単価の高い店舗であっても高色温度を採用します。化粧品を売る店舗は色温度よりも「演色性」を重視した光源を選び色の見え方を気にします。

最近では、簡単に色温度を変えられる照明器具も販売しているため、商品を使うシチュエーションによって色温度を変えられる仕掛けを有する店舗も増えてきています。特にアパレルでは、高色温度と低色温度を切り替えて色の見え方を確認できる仕掛けを有する店舗も増えてきました。

4. 照明デザインと美観

店舗のデザインに合った照明器具を選ぶ：

- インテリアデザインに調和する美しい照明器具を選択。
- モダンなデザインやヴィンテージスタイルなど、店舗のコンセプトに合った照明器具。

解説)

店舗における照明器具といえば、装飾照明を考える人は意外と多いです。

その場合、ペンダント照明やブラケット照明、スタンド照明がそれにあたります。デザインや美観を考える場合は重要な選択肢です。照明器具のデザインを考える場合、インテリア性を重要視するのか？それともアイキャッチとしての役割を重視するのかで、配灯の位置が変わります。

照明デザインと美観を考えた場合、照明デザインはインテリア性、美観はファサードデザインに大きく分けられると仮に定義します。

これを基準にすると、インテリアにおける照明デザインの考え方は内装材や演出する素材にフォーカスし、ファサードデザインはサイン照明を含めた認知度の向上や店舗の存在をPRすることに関連付けた照明計画が必要だと考えます。

外からの店内に視線を向けた時に、店内の様子にワクワクするものを通りすがりに人にインパクトを与えられるか？ 若しくは遠くからでも店舗の存在に気が付いてもらえるような工夫が施されているか？ を考えながら美観を意識します。

路面店の場合、日中は強い外光の影響もあり店内の様子が暗く見え、営業中なのか閉まっているのかを一瞬で分かるように店内のペンダント照明で営業の可否を伝えるためにペンダント照明を採用する事例もあります。

視界にはあらゆるものが目に入ります。夜になると街路灯などの影響はありますが、サイン照明とファサードデザインは大きな影響を与えます。店舗のコンセプトに合わせた照明器具を採用した場合、外からの視線で店舗がどう見えるかを優先してはどうでしょうか。

5. ゾーニングと動線

お客様の動線を考慮した照明配置：

- 店内の主要な通路やポイントを照らし、お客様の移動をスムーズにする。
- 各セクションに適切な照明を配置し、商品カテゴリを分かりやすくする。

解説)

百貨店やアパレル店が入るビル全体の照明は、各フロアーの共有部の照明計画、テナントが入るリースラインに関わる照明のルールを考えながら、「滞在する光」、「楽しむ光」、「引き込む光」、「買わせる光」をそれぞれ計画します。

共有部の照度を落とすことで、サバンナ効果を取り入れ各テナントへの入店を促したり、建築構造上避けられない大きな柱にはあえて光をあてたり、サインを取り入れたりの工夫をすることで、明るさ感やメリハリを作ることが出来ます。

また、フロアー毎の特徴を前面に出し特異性を強調するなどの空間デザインは来店者の記憶に残す効果も期待できます。記憶に残すことは、あの場所が良かった、また行きたいなど再来店を促す記憶の導線設計につながります。

各フロアーに移動するたびにワクワクを感じるビル自体がエンターテイメント性を打ち出し、気が付いたらこんなにも長い時間が経っていた。これには照明だけでなく、空間デザインの力が大きく関与し、そのデザインを引き立てる役割を照明が担うのが理想と考えます。

6. ユーザーエクスペリエンス

お客様の快適なショッピング体験をサポート：

- ・ 調光機能を取り入れ、時間帯や季節に応じて照明の明るさを調整。
- ・ 店内の音楽やディスプレイと連動したムード照明を提供。

解説)

ゾーニングと導線に大きく絡む項目です。時間帯によって照度も色温度も変化するシーン設定のプログラム化も簡単にできるようになったため、店内の BGM と照明を合わせるなどの演出をする店舗が増えました。

環境照明もベース照明だけでなく、演出性のある照明を取り入れ、来店者が自然の流れで楽しめる照明設計（デザイン）も館（やかた）側と意見交換しながら進めることもできます。ビルの店内は基本外光の影響を受けません。

すなわち、時間は時計を頼ることになります。しかし、空の色温度と店内の色温度を連動できる照明器具もあり、日中は青空のように淡いブルーで演出し、夕方は夕焼けを表現する。日没後は低色温度で照度も落とす。

テナントとの境界線のリースラインギリギリのところまで環境照明を演出することは、ウィンドウショッピングだけでも楽しさを提供することが出来ます。のちに買い物客として来店することに繋がります。

物販店の照明プランは、商品の魅力を最大限に引き出し、お客様にとって快適で魅力的なショッピング空間を提供することを目指しています。これにより、売上向上やブランドイメージの強化にもつながります。

〈宿泊施設を計画する時の照明プランのイメージ〉

宿泊施設の照明プランは、ゲストの快適さと全体的な雰囲気重視、細部にわたる計画が求められます。以下に、ホテルや宿泊施設を計画する際の照明プランのイメージをまとめました。

1. 快適な滞在体験

ゲストの快適さを最優先にした照明設計：

- ベッドルームにはリラックスできる暖色系の間接照明を使用。
- 夜間の読書用にベッドサイドに調光可能なランプを配置。
- 自然光に近い明るさと色温度の照明を取り入れることで時間帯による調整が可能。

解説)

最近のホテル居室の照明計画は、間接照明をベースに照明器具の光源が見えない工夫がされた空間設計が主流。

ダウンライトも直接光ですから眩しさの原因にもなります。天井に照明器具がない方が空間的にはスッキリした印象と演出になります。

ヘッドボードの間接照明とリーディングライトだけで構成しても問題は起きません。リーディングライトの種類も豊富にありますから、ヘッドボードと組み合わせも良い相性です。スタンド照明も無くても大丈夫でしょう。

これが旅館となればひと工夫が必要。和風スタイルが主流になりますから、低い位置にスタンド照明を採用したり、壁面の演出に照明を使ったりと空間設計に上手に照明を組み込むことで空間の価値が何倍にも上がります。これは、宿泊を泊まる目的からプライベートな空間を楽しむことにも繋がります。居室の照明効果は予想をはるかに超える大きな「力」があります。

2. エントランスとロビーの印象

第一印象を左右するエントランスとロビーの照明：

- ウェルカムエリアには明るく暖かい光を使用し、歓迎の雰囲気演出。
- ラグジュアリー感を出すためにシャンデリアやデザイン性の高いペンダントライトを配置。

解説)

宿泊施設の滞在は非日常を演出する必要があります。ビジネスホテル、シティーホテル、リゾートホテル、旅館、民宿など、形態によっても価格帯やステータスによっても照明の考え方は様々。大空間に大きなシャンデリアを吊るすのが流行った時期もあり、今でもアパホテルはシンボルとして採用しています。

エントランス、ラウンジ、廊下、客室と様々な場面に合わせた照明設計には、時間帯によってシーンを設定し外から入った時の違和感のない繋がりとして演出を心がけます。

ウェルカムエリアは明るければ良いとは限りません。日中は強い外光の影響で瞳孔が萎んでいますから、明るい空間を作ります。日没以降は極端に明るくする必要はありません。むしろ、鉛直面の素材に光を当てるなどの演出照明を強化した方が空間デザインを引き立てることに繋がった方が良いでしょう。

3. レストランとバーの雰囲気作り

食事や会話を楽しむための照明：

- レストランでは落ち着いた雰囲気を作るために暖色系の照明を使用。
- バーではムード照明を取り入れ、リラックスできる環境を提供。

解説)

レストランやバーの場合は、シーンコントローラーシステムの導入は必須アイテムと考えています。

暖色系での空間構成やリラックスできる環境を作るには、複数の照明を回路でどう振り分けるかを考えることが成功の一番重要な要因になるといっても過言ではありません。

そのくらい、回路分けとシーン設定は重要です。ベース（環境）照明、フォーカス照明、演出照明と最低でも3つの回路分けが必要になりますし、ブラケット照明やスタンド照明が加わるとそれらも別回路でコントロールできます。

飲食を楽しむところですから、空間デザインの価値提供も同時に考えます。

食事を提供するテーブルのひかりは高い演色性を持つ光源の選定はマスト。

バーカウンターならボトルの演出やカウンタートップの演出もマスト。

この演出に合わせて、環境照度をどのくらいに設定すれば良いかを時間帯別にコントロールできるのも、シーンコントローラースイッチの優れた利点。各照明器具メーカーからもシーン設定できるコントローラースイッチは販売していますので、比較検討すると良いでしょう。

メーカー別に特徴をまとめたエクセル表もあります。最高峰に君臨するのは「ルートロンググラフィックアイ QS」ほぼすべての器具をしっかりコントロールできます。

4. バスルームの機能性

機能性と快適性を兼ね備えたバスルームの照明：

- 洗面台には明るい白色光の照明を設置し、顔をはっきりと照らす。
- バスタブやシャワーエリアには柔らかい光を配置し、リラックスできる雰囲気を演出。

解説)

バスタブ、シャワーエリアの照明は照度に問題なければ特に何もありません。

洗面化粧代の照明の理想はハリウッドライト。

これに準ずる照明であれば OK。要するに顔の前面から顔全面を照らし影が出ないこと。

最近の LED 照明は器具効率が高いため温白色（3500K）を選定しても白色光と比較しなければ白に感じます。白色光よりも柔らかく感じるのでお勧めします。

5. 廊下と共用スペースの安全性

安全性とデザイン性を兼ね備えた廊下と共用スペースの照明：

- 廊下には足元照明や壁面照明を配置し、安全な移動をサポート。
- エレベーターホールやラウンジエリアにはデザイン性の高い照明を取り入れる。

解説)

宿泊施設の客室の廊下は長い通路が多い傾向。何も指定しなければ、廊下の真ん中に定ピッチでダウンライトが設置されます。

足元の必要照度を確保するには十分です。この場合、配光角度が狭ければ、壁面が暗くなり陰気な雰囲気になります。あえて狭い照射角度で壁面に絵画の演出をしたり、ルームナンバーをサインにしたりして演出するには良いでしょう。

旅館の場合はスタンド照明を使い部屋の場所をわかるようにする演出方法もあります。安全性の視点で言うと、歩くのに不自由なほど極端に暗くなければ、演出照明で地明かりを確保しても構わないと考えます。

6. 屋外エリアと景観照明

屋外の照明で施設全体の魅力を引き立てる：

- エントランスやガーデンエリアには明るい LED ライトを配置し、夜間の安全性を確保。
- プールエリアや庭園にはムード照明を取り入れ、リゾート感を演出。

解説)

エントランスやガーデンエリアは「明るさ」ではなく「眩しさ」対策を優先します。

明るくても眩しければ不快グレアとなり、せっかくの景観も台無しです。宿泊施設全てに共通しますが、眩しさ対策は最優先順位に位置づけするくらい重要な項目。

人の流れが一方向なら進行方向の後ろから照射すれば良いですが、そうはいきません。

その場合、照明器具そのものがグレア対策の器具を選ぶか。若しくは何かの中に器具をしまい込み、直接光源が目に入らない工夫が必要です。

また、リゾート感を演出するには、植栽の影の演出にも気を付けます。同じ場所から2灯の小型スポットライトで植栽の葉を壁面に映し出した場合、1灯の場合の影と2灯使いの場合の影とでは、影の奥行きも濃淡も全く違う表現で映ります。葉の影を見て素敵だと思います。

う人はいません。しかし、空間全体の演出に一役買って出るととても重要な鍵を握るのも照明の役割なのです。

7. 調光とカスタマイズ

ゲストのニーズに応じた調光機能：

- 各部屋に調光機能付きの照明を設置し、ゲストが好みの明るさに調整できるようにする。
- スマート照明システムを導入し、スマホで操作可能な便利な環境を提供。

解説)

居室照明の一部を調光スイッチにすることには賛成。ですが、例えば部屋に3つのスイッチ回路がある場合すべてを調光する必要はありません。

シンプルに、一番必要だと思う箇所だけに限定する方がゲストはわかりやすいと考えます。スマート照明（スマホと連動できる照明システム）は、一見便利な機能に見えますが、ゲストのスマホとの連携作業があります。

連携方法を丁寧にわかりやすく伝えたとしてもそれを動かすゲストは少ないのではないかと想像できます。ゲストのニーズに応じることを考えるのではなく、キャスト側がゲストに気づかれないように照度を変えたり、演出する光の強弱を設定したりする方が、ゲストには非日常空間を提供できる。すなわち、それがおもてなしのサービスになるのではないのでしょうか。

ホテルや宿泊施設の照明プランは、ゲストの快適さと満足度を高めるために多岐にわたる要素を考慮して設計されます。これにより、滞在中の体験がより一層特別で心地よいものとなるようサポートしましょう。

〈おわりに〉

今回は、私たちの身近に存在する住宅（暮らし）、飲食（食べる）、物販（買う）、宿泊（泊まる）の4つの形態上の分類で光環境の考え方を照明の専門家としての目線でお話しました。光の好みは人それぞれで万人に合うものはありません。ですが、空間デザインを多角的な視点で見る一つの指針になるのではないのでしょうか・

この本では具体的な照明器具の選定方法までは言及しませんでした。照明器具の種類は国内で販売している商品だけでも数十万種類を超えます。用途によって機能も価格も幅広く使う場面に応じて細かな選定が可能。これはアイディア次第で空間デザインのグレードが飛躍的に上がることに繋がります。優れたデザイナーや建築家は光の使い方、光の重要性を利用して新しいデザインを生み出しています。

購読特典の「[光るアロマストーン](#)」の作り方を参考にして、あなたの身近にあるもの、あなたのお気に入りのものなど、ちょっとそこに灯りがあるだけで、部屋の雰囲気が変わるかも・・・ そんな気づきを感じてもらえたら嬉しいです。

照明士 / 商業施設士 / 竹灯りマイスター

三原 慎一